

緒言

日蓮宗現代宗教研究所所長

赤堀 正明

一点の火を

揺籃をゆらす手は、もってよく天下を動かすことをうべし

(ゆりかごを揺らす女性こそ、世界を動かすことができるのです)

明治32年に実践女子学園を創立した下田歌子が好んだ言葉です。

蓋し余等が望みや大なり。余等が力小なり。小を以て大を行わんとする。

もとよりその事の至難なるべきを知る。しかれども、志の行く所、何事か成らざらん。

ここに意を決して、一点の火を我が婦人社会に放つことを試みんとすなり。

私の好きな歌子の言葉です。

下田歌子は当時、社会的に低い立場にあった女性の家庭内での役割の重要性を説き、その地位の向上に勤めました。女性の「自立・自覚の道」を切り拓いたとも評されます。

日蓮聖人は法華經の信仰は志にあると示されています。志とは心に決めた目標に向かうことですが、歌子の「凜とした」生き方に強い志を感じます。

女生徒の体育授業や、小学生の英語教育を始め、自ら源氏物語を講義した、下田歌子の生き方に学び、更に一步を進め、ガラスの天井を打ち破ることを希います。